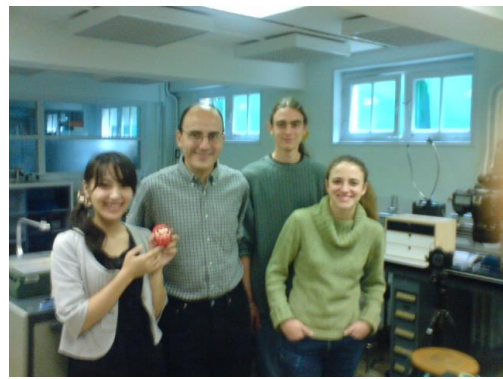


フランスに留学して

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
理学専攻 青柳 裕子

私が留学したのはパリ 5 区にある ESPCI (École supérieure de physique et de chimie industrielles de la ville de Paris) というグランゼコールの一つで、建物の印象があまり大学という感じではなく、敷地もこぢんまりしていてどこか母校を思わせるところがあり、初日から親近感が湧くところでした。はじめはかなり緊張していましたが、私の受け入れ研究室のボスである Jose Bico 博士は 37 歳と若く、研究室全体も明るく音楽が流れていたり

と自由な雰囲気、私の緊張も徐々にほぐれていきました。海外へは観光でしか来たことのない私にとって、研究室に来て最初に驚いたことは、教授と学生が first name で呼び合っていることでした。Jose のキャラクターに因るところも大きいかもしれませんが、学生や PD が友達と接するように先生と接するのが印象的で、ランチにラボの仲間全員で行ったり、16 時のティータイムに教授自らお茶をいれてくれたりと、日本とは随分違うなあと感じました。Jose の研究室はもともと外国人を頻繁に受け入れているらしく、私が持ちこむ日本文化にも興味津津で柔軟に接してくれて、節分の豆まきを一緒にやったり、〇〇君、〇〇さんと君やさんをつけて呼び合うのが流行ったりもしました。ただ、豆まきの豆がピーナッツだったため、年の数だけ食べるというルールが年長者には大変そうでした。また、毎週月曜日は当番制でランチを作るクッキングクラブというのがありました。作る人のセンスや国籍によってフランスの家庭料理がでてきたり、メキシコのスパイシーな料理だったり



左から 2 番目 Jose Bico 博士

と毎回楽しく、私もお好み焼きを作って、いろんな人と交流を深めました。そして、フランスでは博士論文の公聴会の後に、発表者が主催するパーティーでシャンパンを乾杯したり、学校の地下にバーやビリヤード台があるなど、仕事と遊びが近くにあってしかもちゃんとバランスしているのが、見事だなあと感じました。



節分の様子

研究面では、私はこれまでシミュレーションを軸に理論の研究をしてきたので、実験をするのは初めての経験のため知らないことや解らないことだらけで覚えなくてはならない

事がたくさんありましたが、小さなことでも聞きやすい環境で、私の「〇〇したい」という気持ちと一緒に取り組んでくれました。どうやったら実験の工程がシンプルで効率的なのかをととても真剣に考え、実験に必要な材料を一から自分たちで作るのはとても楽しい作業でした。また、加工するのに特別な技術が必要な場合は、メカニカル専門の方が作ってくれるというのには驚きました。必要な時には他の研究室の方を招いて意見を聞きながら、研究を進めていきました。また、ラボの誰かと実験に関する相談や議論をしていると、通りかかった人が議論に加わっていつの間にか大勢で話していることもしばしばでした。このようないつでも誰とでも議論できる環境は私にとってとても新鮮で楽しく、とても勉強になりました。帰国直前の3月には、たまたま近くの大学で国際会議があり、私もそこで実験成果をポスター発表する機会に恵まれ、いい経験となりました。

日本ではあまり身近にいない女性研究者にも、フランスではたくさん出会う事ができました。そのうちの何人かは、お宅にディナーに招いていただいて研究と家庭の両立や女性研究者としてのハンデだと思う点など色んな話を聞くことができました。フランスはレディファーストの国でもあり、女性が働くための制度や環境も日本と比べて整っており、家庭の在り方も違うので簡単にマネはできませんが、それでも彼女たちの日々楽しそうな様子や、子供たちが「ママは自慢のお母さん」と話す姿に学ぶことがたくさんありました。



フランスの子供と遊ぶ様子

学校以外の生活では、“できるだけフランス人っぽく”をテーマに、できるだけフランス語で会話して、マルシェでは見たことのない野菜に挑戦し、チーズやスイーツも日本では見たことがないような物から挑戦しました。たまに、ひどい失敗もしましたが今となっては楽しい思い出です。また、ラボや寮の友人が誘ってくれるパーティーに参加して、人の輪をぐるぐるめぐって全員とするビズや、ダンスのステップを教えてもらったり、ワインの見本市に行ったり、かわいい雑貨や洋服のお店を教えてもらったりと学校やガイドブックだけでは味わえないフランス文化も体験しました。長期の休みには、日本から来た友達と南仏やベルギーへ行き観光も楽しみました。

私がフランスにいたのは6カ月と短い時間でしたが、その間、本当にたくさんの貴重な体験をさせていただきました。これらを通して学んだこと感じたことをこれからの研究生生活に活かしていきたいと思います。

最後に、フランス政府給費生として留学する機会を与えてくださった関係者の方々、また日仏理工科会のご支援、湯浅年子記念特別研究員奨学基金に感謝いたします。